

狩野探幽周辺の倣古図に関する一考察—探幽筆「学古図帖」を中心に

野田 麻美（静岡県立美術館）

狩野探幽を中心とする江戸狩野派の様式確立について考察する上で、探幽とその周辺画家が描いた〈倣古図〉は、特筆すべき作品群と言える。従来、江戸狩野派の絵画制作において学画や粉本教育が重視された点は注目されてきたが、〈倣古図〉制作の意義については、十分検討されているとはいえない。探幽らの倣古図の制作は、古典図様の学習に多大なる貢献をした一方で、粉本制作とは異なる、創造的な側面を備えている点も看過できない。和漢の名画に倣い、自らの様式でアレンジして描いた探幽や安信の倣古図を具体的に検討すると、原画との距離は多様であり、また必ずしも原画が存在するとは限らない点は、注意する必要があるだろう。日中の古画を模写した「探幽縮図」などと倣古図には、本質的な相違が認められるのである。本発表では、狩野探幽筆「学古図帖」（個人蔵）の各図の分析を中心として、探幽や安信の倣古図の特徴とその様式的確立、展開について考察することを試みる。そして、探幽とその周辺画家にとって、倣古図の制作が新しい絵画様式の確立につながる挑戦であり、また江戸狩野派の様式確立にとって重要な意義を有するものであったことを指摘したい。

まず、探幽の「学古図帖」の各図について、原画との関係を踏まえつつ、狩野安信筆「倣古名画卷」（個人蔵）、狩野常信筆「和漢流書手鑑」（個人蔵）、狩野昌運筆「百流之絵鑑」（福岡市美術館）等との図様の異同について分析する。それによって、「学古図帖」が江戸狩野派の倣古図にとって古典的・規範的作品であったことを確認する一方で、探幽が和漢の名画にとらわれず、自在に自己の様式を用いて多様な画題を描き分けている点にも注目する。

次に、安信や常信の倣古図について分析し、安信のそれが図様を整理し各図に安信画としての様式的特徴が認められること、常信のそれが探幽の倣古図の図様を忠実に学んでいることを述べる。両者の倣古図は粉本としての性格が強い一方で、特定の図様や様式、画家との結びつきが弛緩する傾向も有している。倣古図としての特色が希薄化している点を図様の比較により明らかにし、安信と常信によって江戸狩野派の倣古図の図様は整理され、様式化された点に言及する。

また、安信や常信の倣古図において、図様自体が規範化され描きつがれていくことで、和漢の名画に倣うという体裁から、より自由な雑画帖の制作へと展開していったことに注目する。そうした流れが、やがては英一蝶筆「雑画帖」（大倉集古館）のような作品へと発展してゆくさまを、具体的に作品を追って考察する。

江戸狩野派における倣古図様式の展開を概観した後、あらためて探幽の「学古図帖」の規範性と創造性について、江戸狩野派の倣古図様式の展開の中で有する史的意義についても触れ、探幽が倣古図制作によって何を目指していたのか、考察することを試みる。